

歌と逆に。歌に。

池田 昇太郎

■活動内容

本事業は、申請時に掲げたとおり、大阪に生まれ生涯にわたり大阪を主題とした詩作と批評を行った詩人・小野十三郎の作品と足跡を、現代の言葉と表現によって再解釈し、後世に発展的に継承することを目的として実施した。今年度は、昨年度の音楽公演での課題を踏まえ、「詩」「言葉」「声」の関係性をより多角的に検討するため、展示およびパフォーマンスを含むインスタレーション形式での発表を行った。

「歌と逆に。歌に。」プロジェクト 2025

展覧会「大迂回（おおうかい）」

会期：2025 年 12 月 12 日(金)～14 日(日)、
12 月 19 日(金)～21 日(日) 13:00-19:00

会場：イチノジュウニのヨン

作家：池田昇太郎

コラボレーター：藤原佳奈、朴建雄、佐藤文音

プロジェクトマネジメント：伴朱音

記録編集：永江大 宣伝美術：田中裕樹

映像・音響テクニカル：FIGYA 合同会社

プロダクションパートナー：mizutama



■コンセプト・ねらい

池田は、大阪を拠点に活動を行う作曲家・音楽家の日野浩志郎と共に大阪で生まれ戦前から戦後にかけて活動した詩人・小野十三郎が、大阪の重工業地帯に取材した戦前の詩集『大阪』と彼の詩論の柱である「歌と逆に。歌に。」という言葉を手がかりに、3 年のリサーチと作品展開を行なっている。2024 年 8 月には、クリエイティブセンター大阪にて、同詩集で重工業地帯として描写される大阪の湾岸エリアを中心にフィールドワークを行い、音楽公演へと展開した。

小野は大阪文芸大学の創設者・初代校長であり、小野十三郎賞という優れた詩集等に贈られる文学賞があるにも関わらず、その仕事が大阪の芸術実践者に顧みられていないとは言えない。本公演の制作風景や小野に関する考察、公演の録音・録画を映像配信・出版物として世界的に発信していくことを予定しているが、それは小野への再評価に繋がると同時に、関西だけではなく日本全体にとって文化的向上に繋がる。結果として、来場する観客だけでなく、配信を試聴する人や出版物を手にする人達に対しても、音楽的・文学的・視覚的という多角的な表現を提供できると考えている。

2025 年は本プロジェクトの 2 年目にあたり、小野の詩的实践を多角的な視点で展くことを目的とし、参加型のツアーやパフォーマンスを含む展示形式での発表を行う。言葉、身体、空間における上演のあり方を探求している戯曲作家・演出家の藤原佳奈、ドラマトゥルグ・批評家の朴建雄といった舞台芸術領域とのコラボレーションにより、テキストを場に展開することを展示とする試みである。

■活動実績

搬入設営：令和 7 年 12 月 8 日(月)～令和 7 年 12 月 11 日(木)

展 示：令和 7 年 12 月 12 日(金)～12 月 14 日(日)、令和 7 年 12 月 19 日(金)～12 月 21 日(日)

搬出撤去：令和7年12月22日(月) ※休廊日も会場を占有し、作品メンテナンス・記録撮影を実施。

開館時間：12:00～19:00 入場料：無料 展示動員数：180名

▼関連企画

①トーク「詩というメディアのパフォーマティヴな実践について(反省と派生)」

概要：詩人・池田昇太郎、美術家・佐藤文音、演出家・藤原佳奈が、詩/美術/上演それぞれの眼差しから本展を振り返る。

開催日：令和7年12月13日(土)

トーク：池田昇太郎、佐藤文音、藤原佳奈

進行：朴建雄

参加費：1000円(ドリンク付) 参加者数：18名

②ツアー「脱迂回」

概要：会場からある場所に向かうその道中の出来事に触れながら歩き、目的地で解散する。

開催日：令和7年12月21日(日)

ツアーガイド：池田昇太郎

ゲスト：おおしまたくろう、菊池航、白丸たくト、持木永大

参加費：1500円 参加者数：5名



■成果・効果

会場となった西成区山王のイチノジュウニノヨンは、小野十三郎の詩にも描かれた土地であり、戦前から続く商店の倉庫を改装した空間である。ホワイトキューブや劇場ではなく、会場の歴史性や地域性を積極的に取り込むことで、現実と地続きでありながら特異な鑑賞体験を生み出し、申請時に想定していた「会場の固有性を活かした創作」という点を達成することができた。

また、本展示では関連企画としてトークイベントや会場周辺を巡るツアー形式のパフォーマンスを実施し、展示鑑賞に留まらない複数の参加回路を設けた。これにより、詩や現代美術に馴染みのない地域住民や、偶発的に来場した観客も含め、多様な背景を持つ市民が作品と関わる機会を創出することができた。実際に、小野十三郎のことを知らなかった来場者や、生前の小野を知る人物からの聞き取りが行われるなど、リサーチ段階では得られなかった知見や交流が生まれ、作品の内容や質の向上に寄与した。また、チラシを単に広報物に留めることなく、会場内で配られた紙片を挟んで冊子とする構成は来場者に展覧会の場だけでなく、体験を持ち帰ることに寄与した。

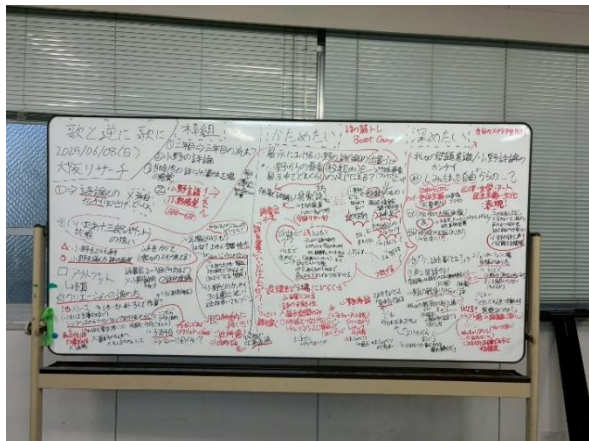
一方で、計画していた関連企画のツアーについては、屋外での実施であったことから、雨足が強い場合も考慮し、迂回路を準備するなどしたが、天候の影響により、参加キャンセルが相次ぎ、当初予約の半数以下となった点は、課題として残った。

しかしながら、本助成金の支援により、展示の核となる機構や映像装置の開発・導入が可能となり、昨年度の音楽公演とは異なる文脈で作品を展開することができた。その結果、来場者層にも広がりが生まれ、新たな観客層の開拓につながった点は、本事業の大きな成果である。

■今後の展開

関連企画のツアーは雨天で、開催中止を検討したが、迂回路を利用しながら開催した。屋外の開催でキャンセルが非常に多く、少人数で敢行することとなってしまった。参加者からは反響もあったため、来年度以降も小野リサーチは今後も進行していくとともに、ツアーパフォーマンスとしての展開も視野に入れながら活動を行いたい。また、今回の展示で生前の小野と関わりのある大阪市民と出会い実際に話をすることができた。今回の経験を踏まえ、生前関わりのあった様々な大阪市民に聞き取りを行うなどの展開も考え、活動のアーカイブへ繋げていきたい。

▼6月に行ったリサーチの様子



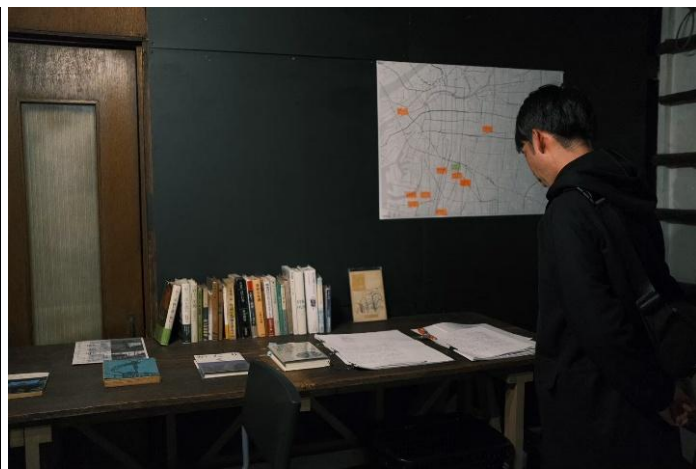
▼9月のリサーチの様子



▼展示設営中



▼展示



▼関連イベント



▼フライヤー



大迂回 おおうかい A Great Detour

ある詩人から掘り起こす、詩のパフォーマティヴィティ
『歌と逆』に、プロジェクト2025

会期 2025年12月12日(金) 14日(日)
19日(金) 21日(日) 13時-19時

会場「イナノジュウニのヨン」
〒571-0001 大阪府大阪市西成区山王1丁目12-14
入場料 入場無料+1Dオーディオ
(酒場にて入場受付)

クリエーションメンバー
池田昇太郎、佐藤文音、朴建雄、藤原佳奈
プロデューサー 伴朱音
記録編集 永江大
プロダクションパートナー「Inkuma」
主催 池田昇太郎
助成 万葉文化財団地域文化活性化助成、
大阪市助成事業、
協力「イナノジュウニのヨン」, E.O.合同会社

イベント
○トーク
「詩というメディアのパフォーマティヴな実践について(反省と派生)」
概要 一詩人、池田昇太郎、美術家、佐藤文音、演出家、藤原佳奈が、詩/美術/上演それぞれのメディアウムへの眼差しから本展を掘り返ります。
日時 12月13日(土) 15時-17時
トーク 池田昇太郎、佐藤文音、藤原佳奈、進行 朴建雄
料金 1,000円(1ドリンク付)
定員 15名
○ツアー
「脱迂回」
概要 会場からある場所に向かうその道中の出来事に触れながら歩いて、目的地で解散します。(時間程度)
日時 12月21日(日) 15時-17時
ガイド 池田昇太郎、ゲスト 多数(お茶を出す、シャツタリを切る、弦を弾く、歪み、言葉を着ている、他)
料金 1,500円
定員 20名
動きやすく、防寒できる服装でお越しください。

概要

本展は詩人・小野十三郎を巡るプロジェクト「歌と逆」に、2年目の試みである。我々は小野十三郎が詩作を行った土地の現在を歩き、詩と詩論を読み、写し、話し、思考し続けている。小野は、1903年に大阪で生まれ、高校を卒業して上京後本格的に詩作を始め、1933年、30歳で大阪へ帰郷する。

「この輩こそわしが自分の眼でもって発見した最初の植物であり、その生態についてはだれからも教えを乞う必要のない、わたしの生活の中の植物なのだ。」

工業地帯と背景にした松原原の広がる風景、大阪を「葦の地方」と呼んだ小野にとって、「風景」は言葉の生成を触する重要なメディアウムであった。本展は小野が見出したメディアウムとしての風景を、《詩の出来事性/出来事としての詩》として再考し、ある詩人をパフォーマティヴに発掘する実践である。小野の詩論の中核である「歌と逆」に、という言葉を大きく迂回することで、《詩》を空間・身体的経験へと差し戻す。

―― 評価の否定が詩作の動機となつていく事がある。時々それが「新しい」詩を創造する直線的な最短距離に見える。しかしほんとうは否定の精神とは謙虚な大迂回である。――

2025年度「歌と逆」に、「プロジェクト」は池田昇太郎を中心とし、藤原佳奈、朴建雄、佐藤文音、伴朱音、永江大をメンバーとしてリサーチ・プロダクションチームを構成した。会場となるイナノジュウニのヨンは、小野十三郎が東京から帰阪した昭和8年(1933年)から柳本商店として酒蔵を営んでおり、当時の付まいが残る酒場兼展示・イベントスペース。

1 奇妙な本棚1時についての自伝的考察 P.07-08、1974年、立風書房
2 詩論+純詩論+想像力 小野十三郎 P.115、1982年、思潮社

池田昇太郎「いけだしょうたろう」

大阪府大阪市出身、詩人・古物商。詩の構成可能性を、テキスト制作にとどめず「出来事」や「場」を企てる実践として展開し、多様な形式で発表、改装を施さず、元おき工場の痕跡を保持した空間を拠点に、国内外のアーティストと展覧会・イベントを実施する「プロジェクトスペース山本製菓」を運営(2018)。詩作行為が相互に干渉し、言葉と出来事の間で一般化を逃れる固有性を他者と分かち合う方法を模索している。

藤原佳奈「ふじわらか」

兵庫県姫路市出身、戯曲作家・演出家、人や場内に存在する(はたらき)に耳を傾け、上演の場へしひらく過程で、それらが目ざしと再編されるのを待つ。劇場実践プロジェクト「松のにわ」の呼びかけ人。2025年より、多分野で協働し対話を重ねながら人間の「からだ」へのまなざしを辿り直す3カ年の「アートプロジェクトひとと」を実施。「上演」というメディアウムが現代においていかに機能し得るか、その可能性を探究している。

朴建雄「はくけんう」

大阪府豊中市出身、現代演劇やコンテンポラリーダンスのドラマトルクとして主に活動。創作現場の多声化、身体表現や感覚の言葉による表現、上演以外の作品と観客の接点や関わり作りを取り組んできた。日本の様々な活動や分野における内輪や境界を超えた場作りに関心をもち、読書しながら仕事と生活について街で考える「クニツク集団」にわたり「中」の活動を2025年より開始。

佐藤文音「さとうあや」

熊本県出身、現在京都を拠点に活動。2023年には日本橋三越本店コンテナギャラリーで開催されたグループ展「遺伝的美意識・Transmission」に参加し、メトロポリタン美術館が公開しているアカイブ写真を再構成した作品を発表。現代アートとしての写真のあり方を主題に、写真というメディアの構造や、その成立過程に伴う思考のあり方を探っている。既存のイメージやテキストを流用・再編する実践を通して、世界とどのように出会え直すことができるのかを問い続けている。



Photo by Shotaro Ikeda